

## 「教員養成の課題についての哲学的研究」

熊本哲也（岩手県立大学、准教授）、関根宏朗（明治大学、准教授）、畠山大（岩手県立大学、講師）、共同研究者：下司晶（日本大学、教授）、須川公央（白梅学園大学、准教授）他

### <要旨>

標記のテーマに関して、教員養成の現代的課題について哲学的側面からアプローチを行い、最終的には社会制度的な側面、歴史的な側面、哲学的人文社会的な側面から共同研究をおこない成果を出すことを目的とした研究であった。成果として、2年目にあたる27年度に共同研究者達とともに執筆した論集『教員養成を問いなおす』を刊行することができた。また、最終年度においては研究会等を開催し共同研究を継続することができた。

### 1 研究の概要

教員養成という日本における現代的課題に関して、いわゆる「教育科学」すなわち実証や臨床、制度論のような社会科学の要素が強い方法論による現状追隨的な研究が多く行われている。その一方で、教育学的「ペダゴジック」な方法論、すなわち、哲学的・人文科学的に分析し、思想、歴史を考慮しつつ対象を実態的に把握しようとする教員養成研究は殆どなされていない。こうした現状に鑑み、この研究は現行の教員養成改革について反省的な考察を共同研究によって多角的、多層的に展開したものである。

### 2 研究の内容

研究初年度においては、「教員養成における思想・哲学の位置価」というテーマのもとに海外の資料・文献の効果的な収集を行うと共に大学内外の研究者との会合・研究会を岩手・東京・弘前でいった。2年度には、論集『教員養成を問いなおす』の執筆作業を共同研究者の個人において行うと同時に、編集、刊行作業を編集者が行い、平成28年3月に上記論集を刊行した。最終年度においては、刊行論集のまとめとして研究会を本学において開催し、複数研究者による報告を行った。

### 3 これまで得られた研究の成果

1、平成28年3月に刊行した『教員養成を問いなおす—制度・実践・思想—』においては、3部構成12章立てプラス特別座談会の内容で総ページ数265頁を数えた。各部各章のタイトルと内容をかい摘んで述べておく。

#### ・第一部「教員養成制度の現状と課題」4章構成

教員養成の制度的な面を対象として社会科学にその歴史や問題点、教員採用、保育教諭の問題を扱っている。

#### ・第二部「教育実践から教員養成を問いなおす」4章構成

現在注目されている「道徳教育」の問題、幼稚園教員の養成の問題、障害者教育の特性、そして現役教員の座談会が内容。

#### ・第三部「教員養成の思想と哲学」4章構成

主に欧米の教育思想家たちの思想から照射した教育や教員の問題を論じたもの。思想家としては、ヘルバルト、

シュタイナー、ルソー、フロムという顔ぶれである。

・特別座談会：「アクティブ・ラーニングで市民と教師を育てる？」と題して、現在の教育学の動向への問題提起やアクティブ・ラーニングと教員養成の関連などを、教育学会の専門家の間で議論したものを収録している。内容は資料Iを参照。

2、平成29年3月の研究会の内容は以下のものである。研究会のタイトルは「教員養成の課題についての哲学的研究」研究会として、教育現場などの報告を交え、教育の現状と将来について参加教員のうち三名から報告がなされた。報告は①関根宏朗、「自律の一契機たる自己開示に関する小考—道徳科指導における「アクティブ・ラーニング」の評価可能性について—」②熊本哲也、「ルソーの『言語起源論』を中心とする「機会原因」の観念について」③畠山大、「大村はま、単元学習における「実の場」の教育哲学的分析—教育空間論及び社会学的学習論を参照項として—」詳細は、資料II-1、II-2、II-3を参照のこと。

### 4 今後の具体的な展開

共同研究を継続し、研究会などを定期的に開催して教員養成だけではなく教育の問題を哲学的に考察研究してゆく。また教育関連の学会において、ラウンド・テーブルなどに成果を報告してゆきたい。